

ミテ＊ハナさん × 美術館 × 佐倉市が生み出すミライ

プロジェクト始動から5年。

ミテ＊ハナソウは、市民を巻き込んで、

年間1500人の対話参加者を生み、さらに変化を続けています。

ここでは、事業評価コーディネーターの熊谷 薫さんをモデレーターに迎え、

仕掛け人の2人とともに、ミテ＊ハナさんの成長をふりかえります。

また、そこから見えてきた、今後のプロジェクトの可能性について

ディスカッションしてもらいました。

三ツ木 紀英
(ARDA代表理事)



永山 智子
(佐倉市立美術館)



ファシリテーションが
キモなんですね

モデレーター
熊谷 薫
(事業評価コーディネーター)



楽しさと厳しさが同居する大人の部活

熊谷 まず、ミテ＊ハナさんとの4年間を振り返るところから始めたいと思います。この間のミテ＊ハナさんの変化には、さまざまなレイヤーがあると思います。特に心理的のどのような変化があったと思われますか？

三ツ木 1期生にすごく意欲のある25人が来てくれた、これが互いに学び合うことの原動力になったようです。2年目には「ミテ＊ハナソウ展（以下、ミテ＊ハナ展）」を、自分たちで工夫を重ねて運営する機会があった。この展覧会によって、団結力ができて自信もつけたと思います。楽しさも実感して。そういう前向きな1期生を軸に、2、3期生が周りを固めています。

永山 実は私は、「楽しい」というところは、それほど予想していなかったのです。でも、ミテ＊ハナさんの熱意がすごくて、それはとにかく自分が楽しくできるからなんだなって。ミテ＊ハナ展に担当日以外にも、楽しく来てくれる。そして、「研究の間」が、ミテ＊ハナさんの居場所になったのだと感じます。

熊谷 楽しいというのは、一番大事なことですよね。さらに「居場所感」みたいなものもできた。これはミテ＊ハナさんへの影響が大きいでしょうね。彼らの活動は自主練習も頻繁で、大人の部活みたいですね。研修もしっかりしていますよね。

三ツ木 結構、体育会系なんです。自主練習して「ここまでできた！」とミテ＊ハナさんは思っていたのに、研修では三ツ木からダメ出しされる。凹む時もあるようですが、お互いに慰め合ったり、また乗り越えて行くという青春ドラマのような……。ボランティアだから、ここまでできればいいとしてしまうとそこまでしかできない。同志として、ミテ＊ハナさんの力を信じています。そのうち私よりも上手い人が出てくるだろうと。

永山 三ツ木さんは、研修での肩書は講師ですが、先生や指導者ではなく、ファシリテーターの位置にいて、自分自身も成長している。ミテ＊ハナさんたちは最初、「こういうときは、どうしたらいいですか？」と尋ねていました。でも三ツ木さんは、「どう思うの？」と返す。「私だったらこうやるよ」とすぐに返さない。そう返すと、自分で考える幅がなくなり、三ツ木さん

の言うことを聞くだけになってしまいます。ふりかえりも徐々にそのパターンになりました。

ファシリテーションが引き出すミテ＊ハナカ

熊谷 鑑賞だけではなく、日々の繰り返しの中で「自分はどう考えるの？」ということが続けるのですね。

永山 実際に現場で子どもたちに関わるのはミテ＊ハナさんで、私や三ツ木さんは何もできません。その場で起きることに対して、ミテ＊ハナさんたちが同じ方向を向いていないと、その場での対処ができない。だから、彼らの中に「考える態度」をつくっていくことが、ミテ＊ハナさんの研修だと思っています。

三ツ木 その態度をつくっていくために、活動の目的がどういうことか、優先すること、大事にしなくてはならないのは何か、みんなで常に確認することを意識して行っています。これは、ミテ＊ハナさんの自主的な活動に対しても同じですね。

熊谷 プログラムと運営の仕方が、「対話で紡ぐ」方向になっている、プロジェクト全体がそうファシリテートされている。それが5年でこれだけ成果を出せた一因でしょうか？

三ツ木 そうなるようデザインはしているつもりですが、それだけでも上手くいかないと思っています。永山さんが「よい聴き手」であるというのは大きいですね。「どうでしょう？」「どうしてこうなのでしょう？」と尋ね、相手の話を聴いて、納得できたらそうしましょうと進めるんですね。上下関係ができやすい学芸員とボランティアの関係がフラットになって、むしろ永山さんが心配だからみんなで助けようという感じすらある！

永山 私が頼りないのでボランティアが育つ……。とにかくボランティアさんと美術館の関係をフラットにしていきたいという思いはすごくあります。まずはみんなの考えを聴く、そこから話し合っ、何が大事なことを考えるというのは、「対話で紡ぐ美術鑑賞」のいいなと思っているところです。私自身もちろん、この態度を持っていたいと思っています。

聴く力が変えること

熊谷 それはとても大事で、先進的ですね。聴く重要性が出てきましたが、聴く力や考えて話す力も含めたコミュニケーション力について、ミテ＊ハナさんは元から優秀だったのですか？

永山 私はどんどん変わってきていると思います。美術に興味がある人、知識が豊かな人は、それをしゃべらずに聴く段階を1つ越えなくてははいけません。そこから人の話を聴くことが面白くなる段階へ。あの人、絶対しゃべっちゃうよなと思っていた人が聴くに徹する、そして聴くことが面白くなっているのがわかる。そこでまず、変わることができるんだと思いました。そして、ある時期からは人の意見を聴くと、自分が感動する。この段階も過ぎないとダメですね。

三ツ木 その次に感動で舞い上がりず冷静に受け止めて、言葉を紡がなくてははいけません。そうしていくと自然に、大きな声の正しそうな意見も、間違っている意見も、どれも発見のある大事な視点があることが見えてきます。また一見、対立しているように感じられた意見に共通点が見えてくることも。それって美術鑑賞だけではなく、社会で共生していくためにすごく大事なことですよね。

熊谷 今出てきたことは、人にとっての根本的に大事な聴く力ですね。こういう場があるから、きちんと聴く人になって考えていく。このようなプロジェクトを、佐倉市立美術館で行う価値について、改めてお聞かせください。

三ツ木 ミテ＊ハナさんにとって、ミテ＊ハナ展のような、自分たちが活躍する舞台があるというのは、大きな魅力だと思います。それがあと押しして「美術館の」ボランティアとしてのプライドや責任感も生まれてきています。このように、鑑賞者の立場だった人がこれだけ主体的に参加する場として機能しているのは、美術館としても少数派では。

永山 現代のホワイトキューブの美術館では、作品は文脈から解放されてその中に置かれ、観客が自由に作品そのものをみて考える場のはずです。もともと観客が参加する装置としてつくられていると思うんです。

熊谷 美術館は神殿ではなく、フラットな場だと、ミテ＊ハナさんやミテ＊ハナ展を通じて観客へ伝わっているのでしょうか？

三ツ木 道のりはまだ半ばだと思います。1年目には展示室での対話を聞いて、こんなに勝手なことを話しているのは作家に失礼だと怒り出したお客様もいらっしゃいました。5年たって少しずつミテ＊ハナソウが浸透してきているとは思っていますが。

永山 美術館に期待するものの違いですよね。感動した作品について、人にとにかく言われたくないという気持ちはわかりますが、それを許さないというのはおかしいかと。美術館ではそれは自由ですから。ただ、美術館がフラットな場だと言わないと、人々はそうは思わないんだということに、改めて気づかされました。

三ツ木 このような美術館と鑑賞者のギャップを埋める可能性があるのが、ミテ＊ハナソウ・プロジェクトです。彼らの鑑賞力が少しずつついてきていることに可能性を感じています。

ミテ＊ハナカアップが学芸員の意識を変える!?

永山 ミテ＊ハナさんの、対話のファシリテート技術だけではなく、作品をみる力が上がっていることは実感しています。ミテ＊ハナさんの発見や解釈を聞いて、学芸員がきちんと作品をみていなかったことに気づくこともあります。学芸員は作家の生涯や画歴などから作品に入ることも多いですから。

熊谷 そのあたりの実感を、永山さんは直接感じていらっしゃいますが、ほかの学芸員さんはいかがですか？

永山 プロジェクトを見てくれている人は、同じようなことを言っていますね。うちの収蔵作品になったら、作家は幸せだとも。穴のあくほど見つめられ、語られて。ただ、それに見合う収蔵作品だろうかという話もします。展示も収蔵も、どのような作品を選ぶかということは、すごく責任があるので。なにしろ地方の小さな美術館ですから、収集方針や収蔵品の限界もありまして……。すぐに外から見える変化はないかもしれませんが。



熊谷 地方の館といえば、市民ギャラリーとほかの企画展に来る人をどうつなぐかというお話が出ていました。

永山 今後の課題ですが、市民の作品でミテ・ハナソウ・カイができたらすごいなと思っています。ただ、市民展などの場合、作家が対話を受け入れてくれるかという問題もあります。

三ツ木 実は、作家は結構喜ぶんですよ。作品画像を貸してもらった作家に、こんな視点や解釈が出たと伝えると、とても喜びます。自分の作品はそういう意味も生み出しているんだと。作家は自分の作品を再発見できるのだと思います。

永山 確かにそうですね。

三ツ木 ミテ・ハナさんから、市民の作品で「ミテ・ハナ」をやりたいという声は挙がっていましたし、やってみたいですね。

永山 もし、貸館企画で作家たちも参加して、フラットにミテ・ハナソウをやる動きが出てきたら、美術館の市民ギャラリーに別の意味が加わると思います。

三ツ木 市民ギャラリーとほかの展示会の断絶をうまくつなぐブリッジに、ミテ・ハナさんはなれるかもしれません。

見えてきた課題

熊谷 ほかの美術館事業との連携など、運営的な課題も見えてきました。今後の話も出ましたので、今までの活動から見えてきた、プロジェクトの課題や今後の方向などを聞かせてください。

三ツ木 いくつかあるのですが、当初から永山さんがいなくても運営できる体制をつくるのが、大きなミッションだと思っています。その準備をしてきました。幸い今でも永山さんはいらっしゃいますが、活動が活発になったため永山さんが全部の現場にいられない規模になってきています。

永山 私が参加せずにミテ・ハナさんだけで企画・運営をして、かつ、美術館の事業として成立する枠を作ることが必要だと感じています。学校連携事業も全校実施に広げたいと

思っていますが、すでに毎週、ミテ・ハナソウの活動が入っている状況です。ミテ・ハナさんたちもやりたい企画がいろいろとありそうですし。

三ツ木 学校連携では、プログラムや運営の方法のフレームを作り、ミテ・ハナさんの中からそれらを適切に運営するコーディネーターを育ててきました。彼らだけで現場を動かせるようになりつつあります。アウトリーチも優都苑の活動をミテ・ハナさんと1年かけてやってくるなかで、大体の活動のフレームができてきています。それでも全校実施となると、マンパワー不足は否めません。

熊谷 なるほど。優都苑といえば、職員研修の話も出ていますね。これはもう、ボランティアではなく仕事の域に入ってくるのではないですか？

永山 やはりそう考えますか。

三ツ木 職員研修もそうですが、今の月1回の活動をもっと広くやってほしいとの要望もあります。ただ、この活動はコーディネーターの準備も大変で。今は文化庁の助成金で活動費を賄っていますが、助成金がないと活動できなくなるのは課題ではないかと。トライアル期間は無償でも、今後はせめて有償スタッフであるコーディネーターが動く費用だけでも施設から出してもらおうように交渉すべきかと。施設も利用者からのアクティビティ・フィーなどがあり、予算はゼロではありません。お互いに持続可能な無理のないラインを、見つけていくことも1つの道だと思います。

熊谷 ミテ・ハナさんが自覚を持って気持ちよく活動を続ける環境づくりのためにも、運転資金の確保は必要でしょうね。このプロジェクトは、そのような段階に入りつつあるのかなと思います。

ミテ・ハナさん×作家、そして佐倉の可能性とは？

熊谷 ほかにも見えてきたことがあると思いますが。

三ツ木 どんなプログラムも常に時流や目的に沿って、そのときの最

善を考えるための見直しが必要ですね。学校連携も学習指導要領が変われば、その時代にあったものに常に更新していかないと。それは、市民向けのプログラムも同じです。

熊谷 ミテ・ハナさんもそれに対応しなくてはならない、ということですね。もともと彼らには、三ツ木さんと同じレベルのファシリテーターになってほしいとおっしゃっていました。

三ツ木 ファシリテータースキルはもちろん、プログラムを見直し、自分たちで新しいことを考えたりできるようにもなってほしいなど。そのためには、アートへの理解をもっと深める必要があると思っています。今はまだアートの楽しいとか、きれいという部分しか伝えられてないのですよね。アートの持つ怖さや痛みを伴うような部分も含めて、理解できるという部分。佐倉市立美術館なら作家と一緒に考えてつくるプロジェクトもできるでしょう。生の作家の考えや制作プロセスを体験してから作品をみれば、ミテ・ハナさんの考え方や活動は今までとは違う拡がりを見せるのではないかと。これは永山さんがされてきたワークショップとのギャップを埋める活動にもなるかと……。

永山 このプロジェクトは、大きくは以前やっていたワークショップと同じ方向を向いている、と感じられるようになってきました。当時考えていたのは、「まちや人と美術や美術館とのかかわりを考える」ということでした。作家の宮前正樹さんが、市民ボランティアと一緒にまちを歩いてワークショップをつくることを企画して、その後もその形を続けてきました。毎年興味のある人を募集してつくっていったのです。今、これだけフラットに対話をする訓練をしたミテ・ハナさんたちが作家と一緒に考え、作家の思考プロセスやリサーチに関わったら、どんなことが起こるのか。ミテ・ハナさん一人ひとりの成長にもなるだろうし、「対話で紡ぐ美術鑑賞」が生み出す新しい価値をみつける可能性もあるかもしれません。

三ツ木 SEA(Social Engaged Art)のように社会や地域の断絶や問題にアートが介入することで、市民とともに解決策をさまざまな形で探るような流れも活発になっています。宮前さんとやってきたようなことを、ミテ・ハナさんたちが作家と一緒に、展開していくような可能性もあると思うんです。ミテ・ハナさんの存在も宝ですが、佐倉には歴史や国立歴史民俗博物館のような魅力的な資源もあります。佐倉という立地も活かせると思います。

永山 確かに、1990年代にここでやってきた活動とミテ・ハナの流れにつながっていくと、面白いかもしれません。そして、佐倉の立地といえば、最近気になる東京オリンピックやパラリンピックについても、少し離れた佐倉だからこそ、東京とは違った角度で提案していけることがかもしれませんね。

熊谷 今後のミテ・ハナソウは、作家と新しい動きを創る、美術館をコアに地域へ積極的に関わっていくような可能性も見えてきました。今日はミテ・ハナさんの成長から、美術館が市民と活動するためのキーワードを、そしてプロジェクトの将来展望もうかがえたと思います。どうもありがとうございました。

評価Note

「ミテ・ハナソウ・プロジェクト」
事業評価分析から



事業評価
コーディネーター
熊谷 薫さん

仲間×場で個人が変わり、美術館が変化する

今回の事業評価では、ミテ・ハナさんたちの成長が最も重要な事業の変化を生み出していると仮定し、さまざまな調査をしてきました。当初ヒアリングを通して、ミテ・ハナさん個人が成長し、そこからミテ・ハナさんの仲間たちのコミュニティが変化し、さらに社会へその活動が伝播していくことで、美術や美術館が持つ力が伝わるだろうと想定していました。ところが、よくよく話を聞いてみると、よい仲間がいて美術館という場に集まることができるとい環境があるからこそ、個人が自主的に動き、変化していくことがわかりました。美術作品の鑑賞をきっかけに生まれるコミュニケーションがよい場をつくり、美術館が従来の役割以上の機能を担うようになる。そこからさまざまな活動が派生し、個人の自信につながり、さらに自主的な活動が増える。そうした一連の流れが、より豊かな市民社会の醸成につながっている。これは、ミテ・ハナ展での子どものリピート率の高さ、学校連携事業での先生の気づきや子どもの楽しさ、ユウカリ優都苑での活動の広がりなどから明らかになりつつあるといえるでしょう。

詳しくはP.80へ

ミテ・ハナさんとアーティストで
面白いことが起こせそう

